

『赤光』の編纂と「アララギ」の編輯

安 森 敏 隆

一 「アララギ」の編輯

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』は、大正二（1913）年十月十五日に東雲堂書店から刊行された。明治三十八（1905）年から大正二（1913）年八月までの八百三十四首が、逆年順に配列されている。

もともとは、斎藤茂吉・柿乃村人・中村憲吉・小泉千樫の四人の共著の『馬鈴薯の花』が構想され、出される予定であったことが「アララギ」第五卷第十一号（大正元年十一月一日号）の「広告」である「近刊予告」として載っている。そして、その号の「扉」には、

アララギが大に売れたと通知が来た。僕は一時に不可思議
国へ這入った様な気がした。過去も現在も未来も売れないと
極めてしまつて、ひとりさびしく歩まうとしたアララギに神
様が一寸戯れをした様な気もした。しかし戯れでは無いと御
仰る神様のみ声が聞える様な気もした。その時の間に張つて
ゐた僕の心にこれ迄に為尽した色々な苦勞やら心配やらが
一時に湧いて来て、胸がつまる様な気持もする。通知のハガ
キをつくづく眺めながら僕は巡礼の子を思ひ出した。

アララギは市に売れたり茂吉われ直に嬉しく飯食しにけり
巡礼の子はたらちねの母たづね國行きしかば殺されにけり
巡礼の子の柄杓持つあはれさを泣きて心におもはゆるかも

と、「アララギ」がひさしぶりに売れてこおどりする茂吉の気持ちだが、書かれている。実は、このように書く意味と、「アララギ叢書」の第一号ともなるべき四人の合同歌集『馬鈴薯の花』の刊行を急ぐ意味は、この期にあったのである。実は、この号の二カ月前の「アララギ」第五卷第九号（明治四十五年九月一日発行）の「記念号」は「子規記念号」としてだされ、「アララギ」は廃刊の予定であった。が、島木赤彦を中心とする信濃の同人の反対に思いとどまったのである。

何も彼も小生の腑甲斐なきために候へども、アララギは本月限り廃刊しようとの議も有之候へき。世の中が段々忙がしくなり米も高く、一見呑気な短歌雑誌などに目を呉れる暇が無くなつた様にも考へられ候へば。なれば、もつと同人一般が熱心になり心も緊張して来るまで一時休まうといふのに候。併し一方柿の村人を中心とせる信濃の同人は、今雑誌を出すのは決して無意義では無い。餓ゑても出費すると迄言ひ越し申候。かういふ有様なれば幾ら腑甲斐なき小生なればとて同人諸君に對しすまないと存じ、今迄とほり雑誌を継続し、先生はじめ東京諸同人の御助力のもとに、會計編輯一切の責任

を持ち小泉千樫柿の村人と共に全力を傾け申すべく決心仕候。幸に先生も快諾され毎号御執筆の約有之候。（『編輯所便』）

茂吉が書いた「編集所便」でも触れられている様に、世の中の動向と資金繰りの厳しさがこの期における「アララギ」を「廃刊」しようとした直接の原因であるが、さらにその背後には、創始者・伊藤左千夫と、若手の、島木赤彦・斎藤茂吉たちとの間に角逐があつたと思われる。さらに二ヶ月前の第五卷第七号（明治四十五年七月一日発行）の「アララギ」の「編輯所便」（茂吉）には、「左千夫選」を都合でやめることが、書かれている。

左千夫先生は都合上本号より選歌をお休みに相成り候へば、当分の内編輯当番のものが取捨仕るべく候。小生等は選歌に就ては先生ほどの修練と力量とが無之、唯々自分の力量の足らざるを歎ずるのみに候。

編輯兼発行者で「アララギ選」の選者であつた伊藤左千夫に変わって、茂吉や赤彦が選歌をすることになり、これよりお

大きく「アララギ」の編輯や選歌が変わることになる。

ここでは、「アララギ」発足当時から『赤光』出版（「死にたまふ母」掲載）までの「アララギ」の「編輯」のあり方を辿ることによって、「死にたまふ母」を『赤光』の中に繰り入れていった茂吉の意図を鮮明しておきたいと思う。

第一卷（明治四十一年度）の編輯

- ① 第一卷第二号（明治四十一年十月十三日発行・発行所 植岡短歌会）「東都来信」（薬房）「東都来信（二）」（左千夫）
「植岡消息」（一）（二）（三）

- ② 第一卷第二号（明治四十二年一月一日発行・植岡短歌会）

「東京より」（左千夫）「植岡消息（一）（二）（三）」

- ③ 第一卷第三号（明治四十二年四月三十日発行・植岡短歌会）

「東京より」（左千夫）「編輯雑録（消息）」（礎生）

「阿羅々木」は蕨真一郎を編輯発行人として、「明治四拾五年十月十三日」に「第一卷第一号」が発行された。前身には根

岸短歌会の機関誌「馬酔木」があり、その後を受け継いだ「アカネ」があったが、三井甲之と伊藤左千夫との不和が原因で

『赤光』の編纂と「アララギ」の編輯

「アカネ」発行中に、やむなく「阿羅々木（アララギ）」の発行となったのである。編集にあたって「本誌は当分の内、一カ年に六回或は七回発行を予定に有之候」（「稟告」）としたが、三号目の「第一卷第三号」（明治四十二年四月三十日発行）になって「本誌は春夏秋冬の四回発行と更め申候」（「稟告」）と改めている。最初は隔月刊を予定していたが、思うに任せず、年四回と改めたものの、第二巻から、新たに「アララギ」と誌名も片仮名に変更し、東京都本所区茅場町三丁目十八番地の伊藤幸次郎（伊藤左千夫）へと移すのである。

第二卷（明治四十二年度）の編輯

- ① 第二卷第一号（明治四十二年九月一日発行・発行所 アララギ発行所）「編輯消息 植岡より」（礎生）「比牟呂同人に告

ぐ」（柿の村人）「東京にて」（純）

② 第二卷第二号（明治四十二年十月一日発行・アララギ発行所）

- 「消息」（左千夫）

③ 第二卷第三号（明治四十二年十一月一日発行・アララギ発行所）

- 「消息」（一）（左千夫）「消息」（二）（童漱生）

④ 第二卷第四号（明治四十二年十二月一日発行・アララギ発行所）

- 「消息」（一）（左千夫）「消息」（二）（童漱生）

所)「消息」(1)(左千夫)(2)(千樫)

「阿羅々木」は、第二卷第一号(明治四十二年九月一日発行)より「アララギ」と変更され、「アララギ発行所」となる。さらに第三卷第三号(明治四十二年十二月一日)より「アララギ発行所」となっているが、表紙の字は(伊藤左千夫が書いたとされる)は、第四卷第十号(明治四十四年十一月一日発行)まで「アララギ」となり、第五卷第一号(明治四十五年二月一日発行)から「アララギ」と統一される。

明治四十二年九月一日(第二卷第四号)発行の「東京にて」において「拝啓『アララギ』は今回面目を一新して同人協力の下に東京に於て毎月刊行のことに決定仕り候」と若き同人である石原純は書き、柿の村人(島本赤彦)は、「比牟呂同人に告ぐ」と題して「比牟呂」を「アララギ」に合同することを宣言している。また、東京に移ってからの編輯方針について、斎藤茂吉は「アララギ編輯の大体の方針は伊藤左千夫がこれを統率したけれども、在京の同人が編輯会議を開き、石原純、民部里静、小泉千樫、山本董湫、斎藤茂吉等が順番に編輯することに約束したのである」(「アララギ二十五年史」と、当時を振り返って言っている。この第二卷は、「九月」「十月」「十一月」

「十二月」と一応、順調に月々発刊され、編輯後記に当たる「消息」も伊藤左千夫を中心に、山本董湫、小泉千樫が書いている。

第三卷(明治四十三年度)の編輯

- ① 第三卷第一号(明治四十三年一月二九日 アララギ発行所)
「消息」(千樫)
- ② 第三卷第二号(明治四十三年三月一日 アララギ発行所)
「編集所より」(茂吉)
- ③ 第三卷第三号(明治四十三年四月一日 アララギ発行所)
「編集所より」(茂吉・千樫)
- ④ 第三卷第四号(明治四十三年五月一日 アララギ発行所)
「消息」(純)
- ⑤ 第三卷第五号(明治四十三年六月一日 アララギ発行所)
(ナシ)
- ⑥ 第三卷第六号(明治四十三年八月一日 アララギ発行所)
「消息」1(左千夫) 2(文明) 3(千樫)
- ⑦ 第三卷第七号(明治四十三年九月一日 アララギ発行所)
「東京消息」(一) 文明2/千樫

- ⑧ 第三卷第八号 (明治四三年十月一日 アアラギ発行所)
 「信州消息」(柿生)「消息」(左千夫)「編集所より」(千樫)
 ⑨ 第三卷第九号 (明治四三年十二月一日 アアラギ発行所)
 「編集所より」(千樫)

明治四十三年度の第三巻の時期は、月々の刊行を約束したものの、「二月」「七月」「十一月」が休刊で、九回発行している。

「編輯後記」にあたる覧も「消息」「編集所より」「東京消息」「信州消息」と、微妙に名前が移動しながら小泉千樫が五回、斎藤茂吉、伊藤左千夫が二回、石原純、島木赤彦(柿生)が一回と千樫を中心に書かかれ、編輯事務が、伊藤左千夫中心から在京の若手に移りつつあることがわかる。

第四巻(明治四十四年度)の編輯

- ① 第四巻第一号 (明治四十四年一月一日 根岸短歌会)「消息」其の一(左千夫)其の二(茂吉)其の三(千樫)
 ② 第四巻第二号 (明治四十四年二月一日 根岸短歌会)「編集所より」「追白」(目次では「消息」)(茂吉)
 ③ 第四巻第三号 (明治四十四年三月一日 東京根岸短歌会)

「消息」(其一)「消息」(其二)左千夫宛書簡 胡桃沢勘内
 「消息」(其三)茂吉宛書簡 柿の村人「編輯所より」(茂吉)

- ④ 第四巻第四号 (明治四十四年四月一日 東京根岸短歌会)
 「消息」左千夫「信濃便り」柿人生「編輯所便り」(茂吉)
 ⑤ 第四巻第五号 (明治四十四年五月一日 東京根岸短歌会)
 「編輯所便り」(氏名ナシ)
 ⑥ 第四巻第六号 (明治四十四年六月一日 東京根岸短歌会)
 「編輯所便り」(茂吉)
 ⑦ 第四巻第七号 (明治四十四年七月一日 東京根岸短歌会)
 「消息」(茂吉附記)
 ⑧ 第四巻第八号 (明治四十四年九月一日 東京根岸短歌会)
 「編輯所便り」(茂吉)「消息」千樫 八月二十日
 ⑨ 第四巻第九号 (明治四十四年十月一日 東京根岸短歌会)
 「消息一束」「編輯所便り」(茂吉と思われる)
 ⑩ 第四巻第十号 (明治四十四年十一月一日 東京根岸短歌会)
 「消息」(柿人)

第四巻は、「八月」と「十二月」が休刊で、十回発行してい

る。編輯は斎藤茂吉が中心となり「編集所便」を書いている。

第四卷第一号（明治四十四年一月一日発行）から発行所名が「根岸短歌会」と変更されるが、続く、第四卷第三号（明治四十四年三月一日発行）から三井甲之（「アカネ」）からクレームがつき、「東京根岸短歌会」（第六卷五号まで）とし、表紙（これはすでに第四卷第二号から）にも、この名称が入るようになる。「第四卷第八号」で正岡子規十周年記念の「アララギ記念号」の大冊を出し、つづく「第四卷第九号」で「以後の原稿整理を小泉千樫に依頼いたし候」と言い、茂吉から千樫へと編輯が移っていくことが示唆されている。

第五卷（明治四十五年度）の編輯

- ① 第五卷第一号（明治四十五年一月一日発行）東京根岸短歌会「消息」（左千夫・文明記）「編輯所便」（茂吉と思われる）
- ② 第五卷第二号（明治四十五年二月一日発行）東京根岸短歌会「消息（茂吉宛書簡）」柿人「編輯所便」（千樫）
- ③ 第五卷第三号（明治四十五年三月一日発行）東京根岸短歌会「消息」（一）二月二五日夜柿人（二）（千樫）

- ④ 第五卷第四号（明治四十五年四月一日発行）東京根岸短歌会「編輯所便」（茂吉）

- ⑤ 第五卷第五号（明治四十五年五月一日発行）東京根岸短歌会「消息」（千樫）

- ⑥ 第五卷第六号（明治四十五年六月一日発行）東京根岸短歌会（ナシ）

- ⑦ 第五卷第七号（明治四十五年七月一日発行）東京根岸短歌会「編輯所便」（茂吉）

- ⑧ 第五卷第八号（明治四十五年八月一日発行）東京根岸短歌会「消息」（千樫）

- ⑨ 第五卷第九号（明治四十五年九月一日発行）記念号 東京根岸短歌会「編輯所便」（茂吉）

- ⑩ 第五卷第十号（明治四十五年十月一日発行）東京根岸短歌会「編輯所便」（茂吉）

- ⑪ 第五卷第十一号（明治四十五年十一月一日発行）東京根岸短歌会「編輯所便」（茂吉）

第五卷は、「十二月」を休刊しただけで、十一回発刊されている。編輯は小泉千樫が中心で「消息」を書き、斎藤茂吉がお

ぎなうかたちのときは「編集所便」となっている。第五巻第五号（明治四十五年五月一日）発行の「消息」で「本号は土屋文明氏編輯せられ」とあり、この号より、これまでであった「左千夫選」の欄がなくなる。またこの号で「拜復、とても逢つて話さなくては駄目だ」と、伊藤左千夫は「柿の村人君へ」を載せ、赤彦、茂吉等の若手との確執が表面化してくる。その上で、この章の冒頭でも触れた第五巻第九号（明治四十五年九月一日発行）の子規没後、満十年を記念とした「記念号」で「アララギ」の廃刊を決意したものの、赤彦を始め信州同人によって引きとどめられ、以降「アララギ編輯所を当分の内東京市赤坂区青山南町五丁目八十一番地齋藤茂吉方」（告）に置き、その他の雑務に関する一切を「東京都本所区緑町三丁目三十番地石井方小泉幾太郎方」で行うことが記されている。第五巻第十一号（明治四十五年十一月一日）の「編輯所便」で茂吉は「何の彼のと申してゐる中に今年も十一月に相成申候。アララギは例年の通りにすれば十二月は休刊に候へども本年は或は十二月号は発行するかも知れず候。これは未定に御座候」と、一年十二回の刊行の希望すら、述べている。

第六卷（大正元年・大正二年度）の編輯

- ① 第六卷第一号（大正元年十二月二十六日印刷納本 東京根岸短歌会）「消息くさぐさ」「編輯所便」（茂吉）
- ② 第六卷第二号（大正二年二月一日 特別号 東京根岸短歌会）「編輯所便」（茂吉）
- ③ 第六卷第三号（大正二年三月一日発行 東京根岸短歌会）「編輯所便」（千樫）
- ④ 第六卷第四号（大正二年四月一日発行 東京根岸短歌会）「消息」（千樫）
- ⑤ 第六卷第五号（大正二年六月十五日発行 東京根岸短歌会）「消息」（小泉千樫）
- ⑥ 第六卷第六号（大正二年七月一日発行 アララギ発行所）「消息」（赤彦）「編輯所便」（茂吉）
- ⑦ 第六卷第七号（大正二年八月一日発行 アララギ発行所）「消息」（赤彦）「編輯所便」（署名なし）
- ⑧ 第六卷第八号（大正二年九月一日発行 アララギ発行所）「編輯所便」（千樫）
- ⑨ 第六卷第九号（大正二年十月一日発行 アララギ発行所）「消息」赤彦「編輯所便」（千樫）

⑩ 第六卷第十号（大正二年十一月十五日発行）アララギ発行所）「消息」赤彦「消息」茂吉「編輯所便」（千樫）

第六卷の大正二年度は、「五月」と「十二月」を休刊し、十回発刊している。編輯は小泉千樫が中心でしていたが、遅刊がちなため「五月号の休刊、六月号の遅刊は何とも申訳のない次第であります。（中略）八月号以下は小泉千樫君が専念に編集して呉れます。本月号は致し方なく私が編集したに過ぎません」（『編集所便』茂吉記）と書き、斎藤茂吉がおきなっている。また、大正二年七月一日発行（第六卷第六号）の六号から編集権発行者であった伊藤左千夫から小泉幾太郎となり、発行所名も「アララギ発行所」となり、「アララギは金銭が欠乏したために継続が困難になりました。其で爾後は根岸短歌会は会員組織にして永くアララギの発行を継続しようと思ひます」と会員組織にする事を予告している。その直後、伊藤左千夫が急逝し、八月一日発刊の第六卷第七号の「アララギ」の扉で「大正二年七月三十日伊藤左千夫先生逝く」と通知されている。そして、九月一日発行の「アララギ」に「死にたまふ母」の五十六首の連作が掲載されるのである。

「アララギ」の雑誌の編集は、茂吉の第六卷第一号（大正元

年十二月二十六日 納本大正二年一月一日発行）の「編輯所便」を見る限り、おおよそ次のような日程で原稿が集められ、「編輯」がなされ、「編輯所便」や「消息」が印刷寸前に書かれていたことが解る。

今月号の編輯は十二月九日午前三時半におわり申候。小泉中村両君に手伝つてもらひ候。編輯中一番鶏が鳴き、編輯終りて握り飯など食べ、枕を寄せてのびのび致し候時しばらくして二番鶏が鳴き候。歌の原稿は十一月廿日に締切りそれ以後のは悉く二月號に回し候。それから投稿締切は毎月五日と相定め申候。編輯人が一般に野呂間のため整理が手間取り候事と、今までの様に遅刊ばかりしては、相すまいと存じて右様相定めたる次第に御座候。（茂吉）

「投稿締切」を「毎月五日」とし、「二月号のアララギ歌壇投稿締切は大正二年一月五日にいたし候」と更に念を押している。そして「一月号」の「編輯所便」の書かれた最後の日は「十二月九日午前三時半」で、納本される「二十三日前」であることが解る。

二 『赤光』の編纂

第一歌集『赤光』（大正二年十月十五日 東雲堂書店刊）が刊行されるまでに、次のような編纂過程に於ける紆余曲折があったことが、「アララギ」に載った「広告」や「消息」「編輯所便」を見ることによって推測できる。

最初は、「アララギ」第五卷第十一号（大正元年十一月一日）発行に、突如として、「近刊予告」として載る。

（I）斎藤茂吉・柿乃村人・中村憲吉・小泉千樫共著『馬鈴薯の花』（発行所・刊行予定の日付けナシ）

雪降ればほろほると胡桃の黒き美の土につくなくしいま
別れなむ（茂吉）

山にして虫なくなべに峽の底家もしづみてゆくこゝち
かも（柿人）

谷の奥に蒼く消ゆべき旅の身をすずろはかなくかへり
見にけり（憲吉）

小春日の林を入れば落葉焚くにほひ沁みくもけむりは
見えず（千樫）

『赤光』の編纂と『アララギ』の編輯

このように、茂吉の最初の歌集は『赤光』ではなく四人共著の『馬鈴薯の花』として構想されて「雪降ればほろほると胡桃の黒き美の土につくなくしいま別れなむ（茂吉）」の一首も紹介されているのである。そして、次号の第六卷第一号（大正元年十二月一日）発行の「編輯所便」で「小生等の歌集は必ず発行致すべく候」と茂吉自身も言っているが、この後、この四人共著の『馬鈴薯の花』の広告は載せていない。ところが、第六卷第三号（大正二年三月一日発行）の「編輯所便」で、小泉千樫が「馬鈴薯の花は都合によつて柿の村人と中村憲吉と二人だけの合著で出す。これをアララギ叢書の第一篇として順次二篇三篇と出す筈である。馬鈴薯の花は立派な気持のよいものにした」と中村が苦心して居る。三月中には出るだらうと思ふ」と、四人合著から「柿の村人」と「中村憲吉」の二人の合著になるとの変更が告げられ「五月号」が休刊となり、第六卷第五号（大正六年六月十五日発行）に、次のような「広告」が出る。

（II）アララギ叢書第一篇 『馬鈴薯の花』

久保田柿人・中村憲吉合著・平福百穂装画

■ 四六版二百五十頁 歌数六百五十首

『赤光』の編纂と「アララギ」の編輯

四〇

■ 定価 金八十五銭 送料 金八円

■ 六月二十五日製本出来

発行所 東京日本橋区槍物町九番地 東雲堂書店

近刊

アララギ叢書第二篇 『屋上の石』小泉千樫著

アララギ叢書第三篇 『赤光』斎藤茂吉著

その第六巻第五号の「編輯所便」で小泉千樫は、「五月号はとうとう休刊しました。六月号はうんと立派にして必ず一日にださなければならぬと思つて居りましたのに又又大遅刊をしてしまひました」と云い、「五月号」を休刊した上で、更に六月一日発行でなく、一月半ぶりの六月十五日の発行になつてゐる。そこで「アララギは来月から会員組織にします」と言い、ここでも「アララギ」に大きな転機が来たことを示唆している。そして、「馬鈴薯の花もいよいよ今月中には出来ませう」と言うところからまでこぎ着けている。そして、続く「第六巻第六号」(大正二年七月一日発行)の「編輯所便」で、斎藤茂吉は「アララギ叢書の第一編、『馬鈴薯の花』は愈發行になつた。柿の村人、中村憲吉両君の合著である。われわれ同人は今迄歌集な

どは出さなかつた。然し自分の作物は出来る事なら一冊にして纏めて置きたいと思ふ。今迄も屢々根岸短歌歌集といふやうなもの、發行が企てられたが実行の段になるとなかなか六か敷く、中止されて仕舞つたのである。今回の挙はわれわれの実行の第一歩である。世の中には秀でた歌集は沢山にある。けれども『馬鈴薯の花』の歌は又縦し微かであらうとも特有の色と光とを有つてゐる。世の短歌愛好者に是非一度は読んで頂きたい。そして精読して頂きたい。われ等は歌の界の巡礼である。『馬鈴薯の花』の歌に対する讃詞にまれ痛誓の詞にまれ、皆尽く有難き喜捨である。願はくはこの喜捨を惜まずに頂きたい」と言

アララギ叢書の第二編として、小泉千樫君の『屋上の土』は今年の九月か十月に發行する。

アララギ叢書の第三編として僕の「赤光」は来年の正月頃發行する。(茂吉記)

と宣言している。

ところが、その一月後の「第六巻第七号」(大正二年八月一

日発行)で、次のように、「広告」が変わるのである。

(Ⅲ) アララギ叢書第一篇 『馬鈴薯の花』^{ばいれいしょはな}

久保田柿人・中村憲吉合著・平福百穂装画

■ 四六版 二百五十頁 歌数六百五十首

■ 定価 金八十五銭 送料 金八円

■ 六月二十五日日製本出来

発行所 東京日本橋区槍町九番地 東雲堂書店

近刊 アララギ叢書第二篇 『赤』^{しやく} 齋藤茂吉著

アララギ叢書第三篇 『屋上の石』^{おくやうのいし} 小泉千樫著

すなわち、「来年の正月頃発行する」と言っていた『赤光』が急遽、「アララギ叢書第二篇」になり、「アララギ叢書第三篇」に小泉千樫の『屋上の石』が下ろされるのである。さらに、この号の「編輯所便」で千樫は、「馬鈴薯の花」は七月の初めに市にでた」と言い、「アララギ叢書の第二篇は僕の「屋上の石」を出すつもりであつたけれども、茂吉君の「赤光」の方が先きの原稿がまとまりさうであるから『赤光』を第一篇として出す

『赤光』の編集と『アララギ』の編輯

ことにしました。十月一日には必ず発行出来るだらう思ふ」と言っている。それに呼応するように、茂吉は、「短歌雑論」(15)で

最初は『赤光』はゆつくり時を費して纏める考へであつたが此様な有様であるから一刻もはやく葬つて仕舞ひたい。急掙でもよいからこの夏休に原稿にして仕舞ふ。而して其の厭な歌も皆鬼に角集めて見るつもりだ。(千樫へ)

と書き、「夏休み」に『赤光』の原稿をまとめることを約束している。その矢先の大正二年七月三十日に、伊藤左千夫が没し、同号の扉に

大正二年七月三十日
伊藤左千夫先生逝く

が黒枠にはめられて掲げられるのである。

(Ⅳ) アララギ叢書第二篇 『歌集 赤光』^{しやくくわう} 齋藤茂吉著及装幀

柑子の実……木下李太郎画 東京都日本橋区檜物

町九番地

通草の花……平福 百穂画 東雲堂発行

佛 頭……木下李太郎画

十月一日発行 定価金九拾銭 送費八銭

斎藤君が明治三十八年始めて左千夫先生に歌を見て貰った時から大正二年七月三十日先生が亡くなられた時までの作凡そ九百首を蒐めたものである。今から見ると厭な歌やひどい歌が随分多いけれども兎に角皆蒐めておいた、さうして早く醜い自分を葬つて仕舞ひたい、吾々はこれからである。と作者は云つて居る。然しこの作者は初めから著しく特色のあるみづからの歌を作つて居た。人の追隨を許さない作者みづからの道をひとりぐんぐん歩いて来られた。作者がその特色あるみづからの國を如何に開拓し進んで来たかを見ることの出来るのは吾々読者には甚だ興味があり、利益のあることである。装幀は赤と金とで甚だ気持のよいものである。それに木下さんと平福さんとのいゝ画がは

ひつて居る。十月一日には、必ず製本出来る。(千樫)

第六卷第八号(大正二年九月一日発行)には、アララギ叢書第二篇『歌集 赤光』の「広告」が、一ページをつかつて為されている。と同時に、同号の「アララギ」誌上には、二から四ページに生母いくの死を詠った「死にたまふ母」の連作五十首が、さらに伊藤左千夫の死を詠った「悲報来」八首が、「屋上に石」八首が同時に掲載されている。第六卷第十一号(大正二年十一月一日発行)の「伊藤左千夫追悼号」の「消息」で「赤光」もいよいよ出る。木下李太郎、平福百穂の二氏は非常に御世話になりました。それが僕の崇敬してゐる方方だから大に気持がよい。(中略)『赤光』には君にも内証の歌が三十首ばかりある。然し総じて僕自身あまり気乗がしないのだ。(千樫宛)と、小泉千樫宛の書簡を紹介し、さらに「編集所便」で、「斎藤君の『赤光』もいよいよ出た」(千樫記)と報告している。

このように、紆余曲折の編纂過程を経て、『赤光』は出版されたのである。『赤光』の編輯について藤岡武雄氏は『赤光』の初出異動を調べてみると、大正元年十二月までの作品には、

ほとんど遂行、改作のあとがあり、それ以後の作品にはいどろがみあたらないのである」(『年譜 斎藤茂吉伝』)と指摘している。それ以降、四人合著の『馬鈴薯の花』の「広告」が出されてから、(I)～(IV)のように四回にもわたる構想の変換をし、最後の(IV)の段階において、「死にたまふ母」と冒頭の「悲報来」を組み込ませることによって、最初の構想とはまったく違う、名編『赤光』は出来あがったのである。